

「地元意識」という謎：大学生の地元意識に関する 因子分析

安立，清史
九州大学大学院人間環境学研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/4772274>

出版情報：人間科学共生社会学. 9, pp.115-123, 2019-03-20. Faculty of Human-Environment Studies,
Kyushu University

バージョン：

権利関係：



「地元意識」という謎

—大学生の地元意識に関する因子分析—

安 立 清 史

要 旨

「地方消滅」と言われる時代にもかかわらず、若者たちの間で「地元志向」が生まれているという。しかし「地方」や「地域」のような実体的な概念とは違って「地元」にはとらえがたい曖昧さがある。しかしだからこそ変容する若者の心理や行動の解明に切り込む可能性があるのではないか。そこで学生が「地元」という言葉の多様な意味にどのように反応するかを因子分析を用いて分析してみた。その結果、第1「反地元」因子、第2「地元・居場所」因子、第3「地元・生活」因子、第4「地元・学校」因子、そして第5「地元・田舎」因子という5つの因子が抽出された。これはまだ試行的な仮説形成段階のものだが、大学生の就職活動、「地元志向や地元回帰」の改変や解明に向けて応用しうる分類になりうるのではないか。

キーワード：地元志向、地元回帰、地方消滅、地域、就職活動、因子分析

1 「地元」とは何か—その謎

近年、若者の「地元」回帰が言われている。若い世代の社会学者たちも様々な調査や考察を行っている¹⁾。そこから浮かび上がってくるものは何か。若者のアイデンティティとなる根拠の変容だというのが多くの社会学者の見立てではないか。もはや「私とは何か」という問題意識へ収斂していく時代ではない、国際化という大きなグローバル世界へ拡散していくのでもない、かといって「地方」というリアルで狭い地域性でもない、「ほどほどの幸せ」が味わえる適当な空間、それが「地元」というあたりに漂っているようだ。

グローバル化によって一気に世界が開けたかに見えながら、かえって経済の長期不況や雇用の劣化という負の側面ばかりが若者に迫ってくる。また全国的に「地方消滅」が言われ、超少子高齢化と人口減少社会という不安の連鎖がある。だから若者論が70～80年代の「私とは何か」というアイデンティティ追求から90年代後半の「セカイ系」の超意識世界へ移行したあと、2000年代に入ってから「地元」志向へと転回してきたのではないか。

しかし「地元」とは何か、考えはじめるとこれが難問だ。

「地元」を最大限広くとって「これまで生きて育ってきた社会環境（の一部あるいは全体）」と定義するなら、それは誰にでもあるように思える。ところが必ずしもそうではないのだ。学生たちに「あなたの地元はどこか」と聞くと「親の転勤で引っ越しや転校をくりかえしたので地元らしい地元はもっていない」とか「自分には地元と思える場所はない」と答える学生が思いのほか多いのである。これはどういうことか。

そもそも「地元」とはいったいどのような範囲をさす概念なのだろうか。それはあまりにも主観的であいまいな概念なのではないのか、というのが「地元」意識を研究しはじめると、まっさきに出てくる疑問である。たしかに「地域」や「コミュニティ」といった空間的に定義できる概念²⁾にくらべると、「地元」という概念は、空間を意味しないではないが、それ以上にこれまでの居住経験や人間関係、そして主観に大きく左右されやすいなど、不安定な概念なのだ。これまで「地元」が、行政の基本計画や社会学などの学術研究でほとんど用いられてこなかったのはそのためであろう。

しかしわれわれが「地元」概念にこだわる理由は、むしろこの不安定さの中にこそある。行政区画や空間的な線引きがはっきりする客観的な概念ではとらえることの出来ない若者の意識、その流動する意識をとらえる切り口として「地元」という概念が注目されているのだ。どういうことか。

「地方消滅」と言われる時代状況がその理由のひとつである。もはや「地域」や「コミュニティ」や「共同体」といった概念では、若者のリアリティをとらえきれないからである。

現代を「地方消滅の時代」というなら、全国ほとんどが「消滅しそうな地方」になってしまった。たとえば増田寛也の『地方消滅』によれば、少子・高齢化の進行により、全国には「消滅可能性自治体」が896もあるのだという。全国の市区町村数は1724（2018年10月1日現在）だから、ほぼ半数の自治体が将来的に消滅する危機に瀕していることになる。「地方」自治体の半数が将来的に消滅するかもしれないという途方もない時代に、私たちは生きている。これが若者の「地元」意識に影響を与えないはずがあるだろうか。しかも「地方消滅」という言い方では捉えきれない何かあるはずだ。

2 故郷の地元・故郷でない地元

これを間接的に照射する概念が「故郷」である。ためしに「故郷」（こきょう／ふるさと）を持っているかと聞くと、現在のほとんどの学生や若者が、そんなものは持っていない、あるいは「故郷意識など持っていない／持ちようがない」と答えるのではないか。若者にとって育ってきた環境はある、しかし、それはすでに「故郷」ではないのだ。どういうことか。

伝統的な共同体が持っていた成員への強い影響力や、全員参加が原則の祭りや共同作業、日々顔をあわせて関係を確かめ合うという半強制的な社会的な連帯、そうしたものがすでにあらかた失われているということだ。少なくとも親世代はその共同体の義務をはたしているかもしれ

ないが、若い世代はそれを担った経験がないということだろう。そうすると、そこには、特別な地域社会との交流や交歓、深い絆やつながりはできないということになる。したがって地域や地元への「愛着」もない（もしくは薄い）。そういうことではないだろうか。かけがえのない特別な場所や環境だったという感覚は失われているというより、もともと持っていない。転勤族として全国を転校しながら移り住んできたから、というよりは、生まれてからずっとアパートやマンションといった集合住宅で暮らしてきたこと等が、かつてのような地域の共同体との関わりを不可能にしたのだ。地域や共同体とのつながりや絆は「失われた」というほどの積極的な消失ですらなく、いつのまにか揮発し蒸発して見えなくなった、ということなのかもしれない。

もともとないものを取り戻すことは、定義上、不可能だ。しかし「地元」のような、生まれ育ってきた社会との基礎的なつながりに、これからの社会での様々な事態に対処していけるのか不安が高まってきている。ことに近年の地震や水害、災害や事故の多発など「想定外」の事態に直面したときに周囲の人たちとのつながりを欠いたままでは不安だ。また家族や友人たちとのつながりも情報のやりとりだけでなく、日常的な接触こそ大切だと見直されている。そういう中での「地元」の意味を、あらためて考えたくて学生たちとともに、若者の「地元」意識の構造をさぐる調査を行うこととした。

3 若者の「地元」意識調査

若者の「地元」意識は流動的だ。故郷意識はすでにないが、まったく新しい地域社会意識が形成されているわけではない。共同体意識やコミュニティ意識と同じように、古い意識は消失したが、新しい意識は形成されていない。そういう過渡期的な状態だと想定される。このような状態の意識の解明には、いくつか慎重な工夫が必要である。既存の説明変数ではうまくカバーできない、しかし新しい仮説や要因はまだはっきりしない。そういう段階においては仮説形成のための調査が必要となる。今回のアンケート調査項目は、いわば若者の「地元」意識を探索するための仮説形成にむけて設定された。具体的には多変量解析の手法のひとつ因子分析を用いて若者の「地元」意識の構成要因を探索しようとしたのである。

そこで九州大学文学部社会学・地域福祉社会学研究室の2年生と3年生を中心からなる演習においてブレインストーミング的なフリーディスカッションを行い「地元」について関連しそうな項目を列挙することとした。討議の中で、若者の中に「地元」志向と「反地元」志向とが混在すること、また前年度の調査結果から、「地元」と「田舎」とを等値する「地方」出身学生が少なからず存在すること、どちらかというと大学1年次においては「地元」を否定的に評価し、学年があがり就職活動を開始する3～4年次には「地元」への肯定的評価や「地元」志向が生まれてくることなどが確認できた。

こうした新たな項目を取り入れた調査票で、2018年7月に九州大学の伊都キャンパスにおけ

る1年次生向けの基幹教育科目「社会学入門」と箱崎キャンパス（当時）の2年次生以上向けの「社会学概論」の授業時間内に自記式アンケート調査として実施した。回収されたアンケート調査票は全部で196票である。仮説形成のための試行的調査なので、母集団や回収率などは考慮していない。この点については批判があることは承知している。

4 因子分析による「地元」意識の分類

われわれは「地元」概念を深めるためにいくつかの戦略をたてた。まず操作的な定義なしに若者に「地元」とは何かを問いかけて、その結果から逆に若者の「地元」観を抽出する方法をとった。結果から類型化して後から仮説や定義をつくろうというのである。この仮説なしの調査という手法に適した方法がある。多変量解析のひとつ因子分析である。この手法を採用しようとした理由にはいくつかある。第1は先行研究をみても、「地元」について明確な定義は得られなかった。定義がないわけではないが結果は多様で収斂しない。定義することが困難、あるいは定義不可能な概念なのかもしれないとの危惧もあった。したがって内容を定義したうえで「地元」意識を調査することはできない。第2に、「地元」という概念は明確に定義することは困難だが、しかしどんな人でも「地元」は自分なりにイメージできる、という不思議な特性を持っている³⁾。定義は困難なのに、説明ぬきでどんな人にも理解されるのである（誤理解もふくめて）。その理解（あるいは誤理解）された内容が同一でなく多様であるとしても、理解されてしまうということのほうに「地元」概念の不思議な謎と魅力がある。第3に、「地元」概念は多様ではあるが拡散しすぎることはない。ひとつには収斂しないが、いくつかの軸の周りに集約されそうだ。これは学生たちとのディスカッションやブレ調査から見てきたことである。このような見通しのもとで、われわれは、あえて無定義のまま「地元」概念を提示して、学生が「地元」をどのようなイメージでとらえているのかを調査することとした。今回の調査では様々な角度から「地元」について5段階尺度で評定する項目を25問設定している。

今回は、この項目を用いて因子分析によって抽出された若者の「地元」意識を構成する5つの因子について紹介する。これは上述したとおり、こうした「地元」意識因子がどこにも普遍的に存在することが実証されたわけではない。今回のデータによってひとつの仮説が形成されたという意味にすぎない。したがってこの仮説は、今後の調査研究を深めていけるような起動力をもっているかどうか重要なこととなる。

5 因子分析の結果—5つの因子の考察

このデータを用いて因子分析を行い、プロマックス回転を行ったところ5つの因子を抽出した⁴⁾。なお因子の命名についてはすべて仮説的な段階である。その結果によると、第1に抽出されたのが「地元嫌い」因子、第2が「地元回帰」因子、第3は「生活」因子、第4は「学校」

因子、第5が「田舎」因子である。

因子分析についての詳細は省くが、因子負荷量が4.0以下の項目を削除してプロマックス回転を行うと次のように収束した。

項 目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	Factor5	共通性
Q5.21 21 自分は地元が嫌いだ	0.911	0.083	0.039	-0.005	0.003	0.709
Q5.22 22 自分は地元には関心がない	0.815	-0.004	-0.043	0.014	-0.013	0.694
Q5.24 24 地元を紹介するときに引け目を感じる	0.753	0	0.107	0.13	0.133	0.471
Q5.25 25 自分には地元と感じられる場所がない	0.701	-0.033	0.113	0.014	-0.166	0.436
Q5.20 20 地元には面白い場所がない	0.614	0.155	-0.017	0.036	0.234	0.363
Q5.7 7 地元の近所づきあいは面倒だ	0.581	0.185	0.228	-0.205	-0.068	0.269
Q5.9 9 地元には受け継ぎたい伝統がある	-0.412	-0.146	0.284	0.097	0.175	0.323
Q5.2 2 自分の地元は魅力的だと思う	-0.387	0.32	0.174	-0.049	-0.157	0.612
Q5.3 3 地元には誇りをもっている	-0.38	0.292	0.267	-0.017	-0.048	0.651
Q5.18 18 友人たちがいる場所が地元だと思う	0.192	0.861	-0.147	0.008	-0.058	0.475
Q5.17 17 家族が住んでいる場所が地元だと思う	0.1	0.851	-0.161	-0.153	0.059	0.408
Q5.19 19 地元は自分の居場所だと感じる	-0.007	0.587	0.091	0.171	-0.029	0.588
Q5.12 12 困ったときに相談できる人が地元にいる	-0.16	0.433	-0.003	0.253	0.021	0.53
Q5.1 1 地元は最も長い間暮らした場所だと思う	0.049	0.375	0.132	-0.037	0.091	0.167
Q5.16 16 地元にお気に入りの場所がある	-0.164	0.284	0.217	0.143	0.091	0.439
Q5.4 4 自分の地元で就職したい	0.267	-0.193	1.068	0.006	-0.072	0.795
Q5.5 5 子育てをすればしたら地元でしたい	0.013	-0.043	0.884	-0.024	0.063	0.688
Q5.8 8 地元特有の言葉が好きだ	-0.166	0.174	0.356	-0.072	0.088	0.301
Q5.6 6 親の介護のためなら地元にもどる	0.01	0.164	0.327	0.155	-0.023	0.294
Q5.14 14 中学校時代を懐かしいと感じる	0.059	-0.008	-0.038	0.939	-0.067	0.783
Q5.13 13 小学校時代を懐かしいと感じる	-0.013	-0.09	0.073	0.759	-0.005	0.561
Q5.15 15 高校時代を懐かしいと感じる	-0.344	-0.002	-0.08	0.379	0.013	0.339
Q5.10 10 自分の地元は都会だと思う	0.142	0.037	0.036	0.07	-0.959	0.898
Q5.11 11 自分の地元は田舎だと思う	0.064	0.084	0.109	-0.028	0.876	0.736
Q5.23 23 地元には良い仕事がない	0.298	-0.01	-0.152	0.099	0.41	0.375
因子寄与	6.237	5.633	4.906	4.173	2.311	

因子分析の結果は比較的安定して現れている。以下、その各因子について考察してみよう。

まず第1に抽出されたのは「反地元」因子とも言えるべきものである。「地元嫌い因子」とも言い換えられよう。まさきに「地元」への否定的な要因が集約されてくることが興味深い。若者の地元回帰と言われる現在、若者の「地元」意識というと、「地元」への愛着や肯定的な意識が抽出されると思われがちである。しかしそうではなかった。むしろ「地元」への否定意識のほうベースにあるのだ。そのうえで「地元」への様々な意識が分岐したり、展開したり、転回したりしていくと考えるべきではないか⁵⁾。

今回の調査でも、大学生となって親元から離れ、もしくは自宅から通学していても家族から

相対的に自立し、生まれ育ってきた「地元」に距離をとり、客観的に見る事が出来るようになると、まず強く出てくるのは、「地元」にたいする否定的な評価であることは注目に値する。われわれの第1仮説はこうだ。「地元」は若者にとって、まず否定すべき対象、反発する対象、批判し否定し乗り越えていくべき対象として現れるのだ。なぜか。

アンケート調査ではここまで分析できない。インタビュー調査などから想定されることは、若者にとって親への反発と否定、そして乗り越えという「エディプスの三角形」的な構造は、「地元」にたいしても向けられるということではないだろうか。若い世代の「反抗期」が、「地域」や「地元」に対しても向けられるのだ。

第2の因子は「地元・居場所」因子である。仲間や家族がいる場所、そして居場所として感じられるところ、それが「地元」だという意識である。この因子に影響を与えているのは「友人」「家族」「居場所」「困った時」「相談できる人」といった要素である。家族からはなれ独り立ちしていく不安な過程において、自分を守り、保護してくれる要因のひとつとして、「地元」という安心感を与えてくれるものが焦点化されてくる。いちどは親元や生まれ育った地域からは離れたけれど、将来が不安に思える時代背景の中で、頼れるもののひとつとして、「地元」が浮かび上がってくる。それは困った時にあらわれるサポートなので、通常は最前列にでてくることはないが、人間を支える基礎的な安心感の形成要素であるのかもしれない。

第3の因子は「地元・生活」因子である。仕事をして結婚して子育てし、家族と暮らして親の介護までみたい、そういう場所としての「地元」での生活が意識されている。「就職」「子育て」「親の介護」などのキーワードがこの因子を説明する。学業の次に現れてくるもの。それが生活である。就職や結婚や子育て、そしてやがてやってくる親の介護など、学業の先に見えてくる生活が、この因子を説明するようと思われる。生活を考えると、将来的に地元にもどって就職し、結婚・子育て、そして親の介護も視野というのは、比較的容易に想像できる近い未来である。ただし、因子の負荷量がさほど大きくないことにも現れているように、(今回の調査ターゲットとなっている1, 2年生段階の)若者にとって、このような地元回帰志向は、まだそれほど大きくはない。むしろ地元への反発や反抗があって、その後に地元への回帰要因が生まれてくる、そのように考えるではないかということを、この因子分析は示唆している。

第4は「地元・学校」因子である。地元とは学校生活で味わったような幼少期からの共同体体験によってつくられているという意識である。小中学校から高校までの「学校」時代が「地元」意識に影響している。これはどういうことか。かつてのような伝統的な地域共同体のようなものが、若者の「地元」意識形成要因としては力を失っており、「学校」という共同体での体験こそが、学生にとっての数少ない「共同意識」形成の要因だったということではないだろうか。若者の共同性体験の要因として、ほかに部活動やサークル活動、塾やその他の共同性の機会が「地元」意識の形成と関連するかもしれないことも示唆されている。

第5は「地元・田舎」因子である。自由回答にも頻繁にあらわれる「田舎」という言葉、これはじつに不思議な意味のひろがりをもった言葉である。都会の反語としての田舎のようなの

だが、自己卑下としての劣等感の含みもある。しかしそれだけではない。その否定の度合いは人によって様々である。これは不思議と「地元」に似ている概念なのだ。厳密に定義しろと言われたらできない。しかし多かれ少なかれ、皆がもっている共通感覚のようなものにふれている。主観的で人によってその内容は異なるが、しかし誰でも即座に「分かる」気がする概念。各自のもつ経験や感覚によって内容は異なるにもかかわらず共通するような意識。そのようなものが「田舎」という言葉に集約されている。もちろん肯定的ではない。しかし侮蔑し軽蔑するほどの強い否定でもない。いわば諦めを含んだ半否定的な概念なのだ。それが「地元」という言葉と密接に関連して現れてくる。静かに安定しているが、若者からすると刺激と興奮に欠け、何かを達成する機会や可能性にも欠けるというイメージなのであろう。

以上の5つの因子を概観すると、どのようなことが言えるだろうか。「地元」という言葉が喚起するイメージの両義性である。それは、肯定と否定、親密性とそれゆえの反発、安定感と古くささ、安心感と停滞感、懐かしさであるとともに忘却したい過去、頼りになり受け入れてくれる場所であるとともにもうそこには戻れないかもしれない場所、田舎という言葉に含まれている複雑で両義的な感情などの複雑なからまりあいである。

因子分析だけでは、このような複雑な因子の絡まり合いや、要因間の関係や展開については多くを語ることはできない。そこで、学生たちとデータを共有し、ともに分析しながら、ディスカッションしてきた「仮説」について紹介してこの小論を終えることにしよう。

6 「地元」意識の変容と課題

今回の因子分析によって、どのようにバージョンアップされた第2仮説、第3仮説が作れるだろうか。まず「地元」意識は、家族や地域社会およびその中の人間関係によって形成される部分が大きいであろうから、「地元」意識の形成と展開は、「自己」意識（アイデンティティー）の形成と展開に似てくるのではないか。図式的に要約すると、その中に生まれ育ってきたことによる自然な肯定があり、ついで自己意識の芽生えとともに、その周囲の環境や関係にたいする距離が生まれ、やがて反発や否定が生まれてくる。この自己形成と「地元」意識との関係は、おそらく思春期の反抗期や青年期の批判意識の発達ともパラレルなのではないだろうか。親にたいする反抗や反発が、自己形成の過程で自然なものであるように、「地元」への反発や反抗もおそらく自然な流れなのであろう。われわれが高校生や大学1、2年生へのアンケート調査に見るのは、こうした自己形成と「地元」への批判的な意識の絡まり合いなのである。

しかしそれだけではない。近年の若者の「地元」志向の高まりは、家族や地域の外側の「社会」の不安と不安定さの反映でもあるだろう。グローバル化とインターネット情報化によって一見、若者の将来の可能性は大きくなったように思える。しかしながら、その可能性は正の可能性であるばかりでなく、負の可能性でもある。グローバル化によって経済や雇用は劣化するかもしれない、SNSなどの情報化は過剰にオーバーランして若者は情報に支配されるようにな

るかもしれない。地域独自の文化や環境も失われていくかもしれない。若者の「地元」志向は、こうした負の可能性への危惧とも関連しているのではないか。

したがってわれわれの次の作業仮説は以下のようなものになる。生まれてからしばらくの間は、地元というものには、なんの疑問や好悪もなく、生まれ育った場所というニュートラルな意味づけしかないのだろう。しかし高校生から大学生にかけての「地元」意識は、まさに両義的な転換と転回の過程の中にある。高校生から大学1, 2年生までは「地元」が否定的な、乗り越えるべきものであるように見えているようだ。しかし、就職が現実味をおびる大学3年から4年生にかけては、ふたたび「地元」への意識に変容が訪れる。次第に現実的な思考や志向を持つようになると、安定した場所としての「地元」、安心・安全な生活の場、「地元」は「そこそ幸せな場所」に見えるようになってくるのではないか。あえて言えば、「地元」という概念は、若者の中で、弁証法的な「正・反・合」のように意味展開していくのではないか。

ここから先は、高校生や大学1, 2年生を対象とした調査では限界がある。これがより確証されるためには、就職活動によって、学生時代の外部の「社会」を身をもって感じはじめる4年生へのよりインテンシブなリサーチが必要になるだろう。

7 課題と考察

今回の調査から、大学生のもつ「地元」意識のベーシックな構造についての新たな仮説をえることができた。これはまだ仮説に過ぎないし、学年別、地域別、性別、専攻別など、様々なクロス集計によってさらに仮説をみがいていかねばならない。しかし今回の調査によって、これまで主観的すぎてリサーチには使えないとされていた「地元」概念が、グローバル化や経済や雇用の劣化、「地方消滅」などの社会環境の変化などによる現代の若者の意識の変容を探索するのに適合的な概念であるかもしれないことが示唆された。地域やコミュニティといった概念ももちろん重要である。しかし「地元」という概念には、地域やコミュニティ概念ではとらえきれない時代や社会の変化による若者の意識のゆらぎをすくい取る性能があるかもしれない。

今回は、大学に入り親元からある程度独立しはじめた大学1, 2年生段階のものであるが、その後、大学3, 4年生の就職活動やその後はどう変容していくのか。この多様な「地元」意識が、「地元志向」や「地元回帰」とどのようにつながるのか（あるいはつながらぬのか）。今後の調査や研究に様々な応用が可能になるのではないか。

注

- 1) 阿部真大『地方にこもる若者たち』(朝日新書、2013)、古市憲寿『絶望の国の幸福な若者たち』(講談社、2011)、新雅史『商店街はなぜ減びるのか—社会・政治・経済史から探る再生の道』(光文社、2012)、大澤真幸『可能なる革命』の第9章「新しい〈地元〉」(太田

出版、2016) など。

- 2) じっさいには「地域」や「コミュニティ」概念も、定義する立場によって伸縮したり曖昧になったりしがちであるが。
- 3) 「地元はない」とか「地元を持たない」という答えも、その人が「地元」イメージを持っていることを示している。
- 4) 因子分析を行うにあたっては石川勝彦（山梨学院大学）氏に解析を依頼した。特記して感謝する。ただし因子の命名や改釈は筆者が行っている。
- 5) このことは、NHK の人気ドラマ「あまちゃん」の中でも描かれていたことだ。ドラマ「あまちゃん」の中で主人公アキという「地元」を肯定する主人公のすぐ横には、「地元」を徹底的に否定し、そこから脱出して東京へ出ようとするユイが副主人公として存在していた。

文 献

- 安立清史, 2018, 『災害時におけるコミュニティ組織やNPO 間の連携や協働のあり方に関する調査研究』, (全労済協会・公募研究報告書)
- , 2017, 「「高齢社会」というペシミズム—日本の人口高齢化に取り憑いた呪文」『共生社会学』 Vol.8, 101-112
- , 2016, 「「地方消滅」時代の若者の「地元」意識の現状と構造」, 『共生社会学』 Vol.7, pp.59-70
- , 2016, 「「地元以上の地元」はどこにあるか—「地方消滅」時代の「地方」と「地元」」, 『共生社会学』, Vol.7, pp.71-82
- , 2016, 「地元以上の地元」をめざして—九州大学安立ゼミ・柳川フィールドワーク報告書
- 新雅史『商店街はなぜ減びるのか—社会・政治・経済史から探る再生の道』(光文社, 2012)
- 阿部真大『地方にこもる若者たち』(朝日新書, 2013)
- 古市憲寿『絶望の国の幸福な若者たち』(講談社, 2011)
- 大澤真幸『可能なる革命』(太田出版, 2016)
- 『サブカルの想像力は資本主義を超えるか』(角川書店, 2018)